
紫音の少女 郷愁

柊 潤一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫音の少女 郷愁

【コード】

N2499W

【作者名】

柊 潤一

【あらすじ】

この物語は、同名のペンネームで他のサイトに連載中のものを、加筆訂正して載せています。

話の内容は紫音という、特殊な、殆ど神と言ってもいい様な能力を持った少女が、いろんな人と出会い、様々の事を成し遂げていく物語です。

彼女には「死」と云うものはなく、若いままの姿で流転していきま

彼女はその事を悩んでいます。

私はなぜ死なずに若いままで、このような特殊な力を持っているのか？
私は何のためにこの世にいるのか？

悩みながらも、自分の力を人々のために役立てて生きています。

尚、この物語は二作目ですが、一作目の過去にさかのぼった話になっています。

一作目は他のサイトで完結しており、このサイトには載せておりません。

一作目はこの話が終わった後で、もう一度推敲して載せるつもりではありますが、気が変わるかもしれません。

出来るだけ面白い話にしていきたいと思っていますので、気に入られなかったら、気長にお付き合いをお願いしたいと思います。

プロローグ

紫音は、その黒い影から逃れるために、薄暗い森の中を走り、跳び続けた。

背中まである長い艶やかな髪をなびかせ、緑色に輝く瞳で前を見据えながら、木から木へ飛び、地上に降り、又、木の上へと、細いしなやかな身体を縦横無尽に軽々と、尋常ではない速さで移動させていた。

それは、紫音の特殊な能力―この星の上にある物体を、この星の中心へと、引き付けている重力を自在に操る力―によるものだったが、誰も追いつける筈のない速さで移動しているのにもかかわらず、その影は確実に距離を縮め、背後に迫ってきていた。

紫音は心の中で焦り、芽生え始めた絶望感にさいなまれた。

―だめだわ。追いつかれる…―

その時突然、紫音の目の前に壁が現れた。

左右を見れば、壁は地平線まで続き、見上げれば果てしなく天に伸びていた。

紫音にとって、壁をすり抜けるのは訳もないことだったが、壁の向こうには漆黒の闇が感じられた。

紫音は、折れかかった心を奮い起こし、天を睨んだ。

次の瞬間、その身体は遙か上空を上へ上へと、凄まじい勢いで昇っていた。

しかし、影はすぐ後ろまで迫ってきた。

その悪意の塊が、その息づかいを耳元で吐き出した時、紫音の身体は影に覆われた。

闇に包まれ、消えていってしまう意識を揺らぶるように、紫音は
叫び声をあげた

。

目覚め1

紫音は自分の叫び声で目が覚めた。

そしてすぐに、自分の体を見回した。

異常はなかった。

「夢だったのね…」

思わず呟いたその言葉で、今のおぞましい気持ちが少しは楽になった気がした。

それにしても、なんとリアルな夢だったことだろう。

目が覚めた今でも、黒い影の吐息がまざまざと耳に残り、身体を包んだ闇の感触が肌に残っている。

暫くして、気持ちの落ち着いた紫音は、辺りを見た。

見知らぬ部屋だった。

窓から夕日が差し込んでいる。

「ここはどこだろう?…」

木造の10畳ほどの部屋で、箆笥やワードローブ、テーブルなど、古い物ながらも、一人で住むには十分な家具が揃っていた。

紫音の寝ているベッドの寝具も、清潔だった。

どうやら新しい世界で目覚める時に、誰かに見つけれられたらしい。

その時、ドアを開けて、見知らぬ娘が息せき切って駆け込んできた。

「叫び声が聞こえたけど、どうしたの?」

心配そうな顔で尋ねる娘は、紫音と同じ位の年で、肩までの髪を束ね、頭にスカーフを巻いていた。

農作業の途からしく、服に藁屑が付いている。

紫音は、いきなり飛び込んできた娘に戸惑いながらも

「え？…ええ…。何か、とても怖い夢を見ていたみたいで…。私も自分の叫び声で、いま目が覚めたところなんです。」

と、答えた。

「そうなの…きっと疲れてるのよ。あんな山の中で倒れてたんですもの」

娘は勝ち気そうな目を微笑ませながら言った。

「え…私は山の中で倒れてたんですか？」

「そうよ。覚えていないの？」

「ええ…まったく…」

娘は不思議そうな顔をした。

「あなたが山の中に倒れているのを、薬草を取りに行ったうちのお婆様が見付けたのよ。それから兄と私であなをここまで運んできたの」

「そうなんですか…ご迷惑をおかけしてすみません。」

「ううん、そんなことは良いのよ。それよりあなた、何故あんな所に倒れていたの？」

「それが…私にも分からないんです。何も覚えていなくて、何故そんな山の中にいたのかも分からないんです。」

紫音はそう言って目を伏せた。

「分からないって…。」

「じゃ、あなたどっから来たの？どこへいくつもりだったの？旅をしているような様子でもないし…あなた、自分の名前は分かる？」

「名前は…多分シオンという名前だと思います。でもそれ以外は何も分かりません。」

娘は、驚いた顔で紫音を見つめた。

「そんなことがあるのね…。」

娘がそう言った時にドアが開き、老婆と青年が入ってきた。

「おお…目が覚めたかえ」

老婆はそう言つと、傍らにあつた椅子をベットに引き寄せ
「ちよつくら座らせてもらつよ」

と言つて椅子に腰かけた。

「おばあ様、この方、お名前は紫音さんつて仰るんだけど、それ以外は何も覚えてらつしやらないそうよ」

「ほほお……」

娘の言葉に、老婆は紫音をじつと見つめた。

老婆のその目は、紫音の心の底まで見透かすような目だった。

紫音にとって、この様なことはいつもの事だった。

特別な能力を持つ紫音には生死がない。

死ぬ代わりに、その時代で使命を終えた紫音は、ある日突然消える。

そして、休息の時間を経て又ある日突然、どこかの時代のどこかの場所に現れる。

あたかも一日の活動が終わつて眠りにつき、次の日の朝に目覚めるように、紫音は年を取らずに若い姿のままそれを繰り返しているのだつた。

そして、ある時代に現れた時に一人の時もあれば、今度のように誰かに見つけられていることもある。

一人の時は、これからどうするかを落ち着いて考えられるが、誰かに見つけられた時には迂闊なことは言えなかつた。

本当の事を言つても信用されないだろうし、怪しく思われると、後々が面倒な事になつた。

だから紫音は、そういう時には記憶を無くした事にしていた。

だが、老婆は何かを感じているようだつた。

「ふむ…多分なにか強いショックを受けて、一時的に記憶喪失になつとるんじゃない。頭に怪我はしとらんから、精神的なもんじゃるな。なに、落ち着けば又思い出すこともあるじゃろつて。」

老婆はそう言つと柔和な目になり、紫音に微笑んだ。

「はい…そうだと良いんですけど…」
「どうやら老婆は、紫音を悪い人間ではないと見定め、何も聞かない事に決めたようだった。」

紫音は心の中で感謝しながら老婆を見つめた。

「紫音さんとやら、あんたもこのままじゃ何処へ行くあてもないじやろうから、当分うちにいればよからう。うちも人手が足りんから、農作業でも手伝ってもらえば助かるしの。」

そう言う老婆に紫音は

「ええ、私に出来ることがあれば、何でもお手伝いさせて頂きます。」

「
」
と言って頭を下げた。

「うむ。何もしないでいるのも退屈じゃろうから、よろしく頼むわい。さて私は、部屋へ戻るとするか。」

老婆はそう言って、よつこらしよ、と椅子から立ち上がり、部屋を出ていった。

部屋には紫音と娘と娘の兄の三人が残った。

「紫音さん、これからよろしくお願いしますね。私の名前はジャネットよ。それからこの人は兄のマイク。さっきいたお婆様が、ヘレソお婆様よ。家族は3人だけなの。」

娘はそう言って自分の家族を紹介した後で

「私と兄で農作業をしてるんだけど、人手が足りないのよ。だから紫音さんが手伝ってくれると助かるわ。」

と言って、顔をほころばせた。

「ええ、喜んでお手伝いします。でも…お父様やお母様はいらっしゃらないの?」

「母は、6年前に病気で亡くなったわ。父も去年、病気で死んだのよ。」

ジャネットはそう答えて目を伏せた。

「そうだったの…。お二人だけで農作業をするのは大変でしょ?畑は広いの?」

「ええ。いくつがあるんだけど、まだ耕してない土地もあるのよ。私たちだけじゃ、とても手が回らないわ。だから私、お兄様にいつも言うの。早くお嫁さんを貰いなさいって。」

目覚め2

マイクは着替えた紫音を見て、とてもよく似合ってるよ、と言った。

紫音は、ありがとうと礼を言い、初めて見るこの世界の景色を眺めた。

そこには、今まさに落ちようとする夕陽に照らされた眺めが広がっていた。

左右に遠く山を望んだ平野には田園が広がり、麦の穂が黄金色に輝いていた。

紫音はその美しさに暫く見とれた。

「あの山の中で君は倒れていたんだよ。」

マイクが家の後ろのすぐそばまで迫っている山を指差しながら言った。

「あの山の向こうは隣の国だね。ここはこの国の端っこなのさ。今この国はゴタゴタが続いてるけど、ここはのんびりしたもんだよ。」

「ゴタゴタって?」

紫音は聞いた。

「うん。一年ほど内乱が続いてる。この国の王は内政を顧みず、やたら税金ばかりを重くしてきたんだ。」

国民は疲れきってる。それを正そうと、革命軍が蜂起して戦っている最中なんだよ。」

紫音は、この世界ではその内乱に関わることになるのだろうかと思秘かに思った。

しかし正直な所、余り気が進まなかった。

長い間、時を跨いで旅をして来た紫音は、精神的に疲れているのかもしれない。

自分はいったい何者なのか?

特別な能力を持ち、若いままの姿でさ迷う自分の人生には、どんな意味があるのだろうか？

自分に死は訪れるのだろうか？

そう思うが、紫音にあの悪夢を見させたのかもしれない。

陽はもう暮れかかり、薄闇が辺りを覆っていた。

その時、ご飯が出来たわよー、と母屋の方からジャネットの声がした。

「それじゃ行こうか。」

マイクは先に母屋の方へ歩き出し、紫音もそれに続いた。

木造りの母屋の階段を上り、玄関を入れて右の方から食堂へいくマイクについて行き、紫音も中へ入っていった。

そこは十畳ほどの広さで、奥の暖炉の前のソファーには、カレンお婆様が座っていた。

その手前には、六脚の椅子とテーブルがあり、テーブルの上には、それぞれ4人分の食器と料理が、所狭しと並べられていた。

「ほお…ご馳走だな。」

料理を見ながらマイクが言った。

「ええ、今日は町に行く日だったから、お肉も買ってきたのよ。」

ジャネットはそう言いながらスープを配り終え

「さあ、頂きましょう。」

と言つて椅子に座った。

ソファからカレンお婆様が立ち上がり、テーブルの奥に腰かけ、その右脇にジャネットとマイクが並んで座り、その向かいの席に紫音が座った。

カレンお婆が食事の祈りの言葉を唱え、皆もそれに倣い、食事が始まった。

ジャネットは、大皿に盛られている肉の塊を、スープを飲んでいくカレンお婆様の皿に最初に取り分けてから、各々の皿に取り分け「後は自分で勝手に取ってね。」

と言った。

スープを飲み終え、肉を口に入れたカレンお婆様が

「こりゃ美味いわい。」

と言うと

「でしょ？良いお肉なのよ。私がどうしようか迷っていたら、ジャンが安くしとくから、って言ったのよ。」

「ジャンって、あの肉屋の息子かい？」

ジャンネットの言葉を受けて、マイクが尋ねた。

「そうよ、と言うジャンネットにマイクは

「ふん……。」

と言いながら、ニヤニヤしてジャンネットを見た。

「何よ、お兄様ったら。私、別に色目なんか使ってないわよ。」

「だけど、ジャンはお前の事を好きなんだろう？」

「そうみただけど、あの人、どこか気の弱いところがあるのよね。

私はもっと頼り甲斐のある人がいいわ。」

お婆さんの夢 1

「でも、人は上部だけじゃ分らないよ。いざという時でないよ、人間の本性は出てこないからね。」

マイクの言葉に少し考えていたジャネットは

「そうね。もう少しどんな人か見てみるわ。」

と答えた。

「前に付き合っただけじゃないと言われてから、まだ返事はしてないんだろ？」

「うん。今は家の事があるから、とてもそんな暇はないって、一応は断ったのよ。でもジャンはその気になるまで待ってるって言うってたわ。」

「そうか…。俺は良い奴だと思っただけだな。確かに気の弱いところはあるけどね。」

ジャネットは兄の言葉には答えず、この話を打ち切るように紫音に話しかけた。

「どう？料理は口に合いそう？」

「ええ、とつても美味しいわ。でも私の為にこんなご馳走を作ってもらって、何か、申し訳なくて…」

「まあ、そう気にせんでもええ。」

それまで黙って料理を食べていたカレンお婆様が紫音に言った。

「わしがジャネットに言っただけじゃ。遠慮なく食べて、元気になることじゃ。それが一番大事じゃからのう。」

「有難うございます。」

「実はそなたに話しておかねばならんことがある。その話を聞いてもらってから、そなたの返事を聞きたいんじゃ。」

カレンお婆様は、そう前置きして話し出した。

「わしは若い頃から良く夢を見るのがあったの。それも寝ている

時ばかりではのうて、起きている時も突然見るんじや。まるで白昼夢の様にな。そしてその夢が現実に起こるんじやよ。予知夢と云うらしいがの。最初はその事を人に言っても信用されなんだ。じやが、わしの言った事が現実に起こると、皆は信用せざるおえなんだようじや。しかし、同時に気味悪がられもしてな。

じやからわしは、あまり夢の事を人に言わんようにした。大事な事だけはそれとなく言うようにしたんじや。」

カレンお婆様はそこまで言うで一息ついて料理を口に入れ、食べ終わると又話し出した。

「わしの夢の事はこの子達もよう知つとる。」

カレンお婆はそう言って、

ジャネットとマイクを見た。

「そうね。お婆様の見た夢は、外れた事がないわ。」

ジャネットが言うと続けてマイクも言った。

「確かに、お婆様の夢は現実に起こるね。お陰で随分助かってる事が多い。」

二人が言い終わってから、カレンお婆は話を続けた。

「この子達はわしの夢の事で、世の中には不思議な事があるのは分かつとるし、これから不思議なことに出会つても、受け入れることは出来るじやろう。」

カレンお婆は、紫音を暫く見つめた。

「わしは、ここ最近何度も同じ夢を見た。その夢はこの子達には話さんかつたがの。その夢というのは、空から目映く光り輝きながら、何か降りてくるんじや。最初はそれが何か分からんかった。じやが、何度も同じ夢を見ているうちに、段々とそれが見えてきた。そして、最後の夢ではつきりと見えたんじや。それは、緑の翼を持った髪の長い女性じやった。わしはその女性を神様じやと思つた。やれやれ、わしにもようやくお迎えが来たか、とわしは思い、手を合わせたが、どうも違つようじやった。」

カレンお婆は、そこで、くすつと笑つた。

マイクとジャネットは、初めて聞くカレンお婆の話に食事をするのも忘れ、食い入るようにカレンお婆を見ながら、聞いていた。

「最後の夢を見たのが一昨日での。そして今日じゃ。わしは朝、山の中に倒れている女性の夢を見た。それは、わしが何度も夢で見たあの女性じゃったんじゃ。」

お婆さんの夢2

わしは、慌ててマイクとジャネットに声をかけてから山へ行つてそなたを見つけ、この家に運んだんじゃ。」

カレンお婆は、水を一口ぐくりと飲み、紫音を見つめた。

「わしの話はここまでじゃ。」

部屋には沈黙が訪れ、三人の目は、紫音に注がれた。

「さて…紫音殿、聞かせてもらえまいか？あなたは何者じゃ？神様と呼ぶべきお方なのか？」

紫音は、自分を見つめている三人を、それぞれじっと見つめ返した。

そしてその一瞬に彼、彼女らに意識を重ね合わせ、その全てを覚った。

三人の心はやましい所はなく、純粹だった。

三人は、それぞれ紫音に見つめられた時、一瞬、心の中に風が吹いたような感覚を味わって目をしばたたかせた。

紫音は全てを話そうと思った。

「私は、神様などという者ではありません。」

紫音はそう言つと、暫く黙った。

「他人がどう言つかは知りませんが、私は自分を神様だとは思っていません。確かに私には、特別な力があります。」

そう言つてから紫音は、自分は死ぬことなく、この姿のまま、時代を越えて生きている事を説明した。

「しかし、それでも私は人間です。お腹も空きますし、遅しい男の人を見れば憧れます。女ですから子供を産みたいとも思います。そんな私を神様と呼べるでしょうか？」

ややあつて

「むう…」

とカレンお婆が一言唸った。

マイクとジャネットは、紫音の話にただ呆然としていた。

「神様ではない…か…。」

長い沈黙の後、カレンお婆がやっと口を開いた。

「それでは、神様とは一体なんじやるうか？と云うことになるがのお…まあ、ええわい。この話はひとまず考えんことにしよう。で…これからじゃが、紫音殿、どうするおつもりじゃ？」

「良ければ、暫くここ居させてに頂きたいと思っています。私に何かする事があれば、向こうからやって来ます。いつもそうでした。」

「それはかまわん。大歓迎じゃ。」

「それと、よび方も紫音とよんでください。普通に接して欲しいのです。」

「そうかえ。わかった。そなたを、普通の女の子として扱うことにしようかの。」

「有難うございます。」

「お前達も、この…紫音の話聞いて驚いたじゃろうが、いま聞いた通りじゃ。新しい兄弟が増えたと思つて、仲よつするがええ。」

カレンお婆の言葉で、マイクとジャネットは緊張がほどけ、身体
の力を抜いて笑顔になった。

向日葵の中で

「それじゃ、みんなで楽しく、お酒でも飲みましょう。お肉と一緒に買ってきたのよ。」

「おお、良いねえ。」

すかさずマイクが答えるのにジャネットは

「お兄様は飲みすぎたら駄目よ。」
と応じた。

「なんでだよ。」

「嘘よ。でも程々にね。紫音はお酒は飲めるの？」

「ええ、大丈夫よ。」

「お婆様もお飲みになるでしょ？」

「そうじゃの。久し振りに飲むとするか」

ジャネットは席を立ち、酒の瓶とグラスを持って戻り、グラスに酒を注いで四人に配った。

「それじゃお婆様、乾杯の音頭をお願い。」

「ふむ。それじゃ、皆の健康と幸せを祈って……」

四人は

「かんぱ〜い！」

と言いながらグラスを持ち上げ、酒を口に含んだ。

「うむ、良い酒じゃ。」

そう言って、カレンお婆が笑みを浮かべた。

「ジャネット、今日は張り込んだな？」

マイクが顔を綻ばせて言った。

「そうよ。お祝いですもの。紫音、今日はたくさんお話ししましたよね。」

ジャネットも、話し相手が出来たと、嬉しそうに酒を飲んでいった。紫音も温かい気持ちで、久しぶりの酒に酔っていった。

次の日の朝、紫音は家の周りを散歩していた。朝日が降り注ぎ、爽やかな風が吹き渡っていた。太陽の暖かさが身体に染み込み、その燃え盛る生命のエネルギーが紫音に力を与えた。

麦の穂を風いで吹き渡る風が、ワンピースの裾を揺らし、頬を撫で、紫音の心に溜まった埃を吹き払っていった。

紫音は、みずみずしい充足感を覚えながらゆっくりと歩いた。畑の麦は収穫の時期で、刈り取られた後の麦の穂が積まれていた。ふと右の方を見た紫音の目に黄色い塊が見えた。

「何だろう？」

そう思い、紫音は近づいていった。

それは向日葵畑だった。

遠目に見えた黄色い絨毯が、近づくにつれ、一つ一つの大輪の向日葵の花になっていった。

各々の向日葵は真っ直ぐに、その顔を太陽に向け、誇らしげに立っていた。

その向日葵という生命の、ひた向きに生を謳歌している姿を、紫音は感動を覚えながら眺めていた。

「その向日葵は、母が好きだったんだ。」

突然、後ろから声があった。振り向くとマイクが立っていた。

「おはよう。驚かせてすまない。君を呼びにいったら畑の方に歩いていく姿を見かけたもんだから、追いかけてきたんだ。」

「おはようございます。ちょっと散歩をしようと思って…。お母様の好きな花だったんですか。」

「うん。この向日葵畑は、母が丹精込めて育てていたんだ。母が亡くなってからは僕たち兄弟で育ててる。」

「そうだったんですか」

「うん。母は向日葵のような人でね。真っ直ぐでひた向きで優しく。寂しくなるとここに来るんだよ。この向日葵を見ていると、母に見守られている気がして落ち着くんだ。」

二人は、暫く黙って向日葵畑を眺めていた。

「さあ、朝御飯ができてるよ。行こうか。」

マイクが言い、二人は母家に歩いていった。

母家に入ると、ジャネットが朝食を終えたところだった。

自分の食器を流しに運ぶジャネットに二人は、おはよう、と声をかけてマイクは椅子に座り、紫音はジャネットを手伝って二人分の朝食をテーブルに運んだ。

カレンお婆様の姿はなく、朝食を済ませて部屋に戻ったようだった。

ジャネットはマイクにおはよう、と挨拶を返し紫音に言った。

「おはよう、紫音。二日酔いしてない？」

「ええ、大丈夫よ。何ともないわ。」

「あら、そう…。紫音はお酒強いのね。私と一緒にあんなに飲んだのに。私はまだ、頭がぼくっとしてるわ。」

「ほんとに、良く飲んだわよね。あんなに飲んだのは久し振りだわ。」

動物達との宴

昨夜は、四人とも久し振りのお酒で盛り上がり、ドンチャン騒ぎをしたのだった。

カレンお婆もマイクもジャネットもみんな、寂しかった家に、紫音という家族が増えたことを喜んでいたのだ。

紫音もそれを感じ、破目を外すほどに飲んだ。

皆が酔い始めた頃に、ジャネットが歌を歌い、カレンお婆がその歌に合わせて踊り出した。

マイクはギターを持ってきて、ジャネットの歌に伴奏をつけた。

ジャネットが歌い終わると、マイクがギターを弾きながら歌った。マイクの次に紫音が立ち上がり、綺麗な旋律の歌を歌い出した。

紫音の歌は、身体の六十兆の細胞一つ一つに染み込むような歌で、その声を聞いていると、心の底まで綺麗に洗われていくような気がした。

それから暫くすると、部屋に漂う紫音の歌が透き通った緑色の霧のようになり、それが段々と音符の形になって、部屋中を漂い出した。

壁や身体に当たった様々の形の音符はゴム毬のように跳ね、又ふわふわと部屋を漂って、時間がたつと消えていった。

皆は、紫音の歌を聞きながら、その綺麗で不思議な光景に見とれていた。

その時、玄関のドアを叩く音がした。

「こんな時間に誰だろう？」

マイクが言くと、紫音が歌を止めて

「多分、私のお客様だわ。開けてあげて。」
と言った。

マイクが立ってドアを開けに行くと、ドアの前には、5・6匹のふくろうや狸や、名前の知らない、夜行性の動物達がいた。

動物達は、驚くマイクの横を通り抜け、部屋の中へ入ると、挨拶のつもりなのか、神妙な顔で一声鳴き、紫音の周りに集まった。

紫音は又、歌い出した。

動物達も、紫音の歌に合わせて、高く低く歌い出した。

それは、ほのぼのとした人間と動物のコラボだった。

見ている三人は、生き物として、動物よりも人間が上だという普段当たり前に思っている気持ちが消え、この星にいる生き物達は、全て平等なんだという思いが沸き上がってくるのだった。

歌が終わわり、三人は思わず立ち上がり、手が痛くなるまで拍手をした。

その後、マイクが賑やかな曲を弾きながら歌い出すと、みんなそれに合わせて踊り、動物達も一緒に飛んだり跳ねたりして踊った。

狸は器用に後ろ足で立ち、手足を動かして踊っていた。

皆、その滑稽な踊りに、声をあげてゲラゲラ笑っていた。

そんなふうに、人間と動物達の不思議な宴会は、深夜まで続いたのだった。

新しい畑

「でも紫音、あなたって不思議な人ね。歌声が音符の形になったり、動物達と一緒に歌ったり踊ったりして。どうやったら、あんなことが出来るの？」

「さあねえ…私にも分からないわ…。何かよね、気持ちを込めて集中していくでしょ？そしたら出てくるのよ。」

「ふん…。」

その時食事を終えたマイクが立ち上がった。

「俺は昨日の続きをしてくるよ。」

「進み具合はどう？」

ジャネットがマイクに聞いた。

「いやあ、結構大変だよ。埋もれてる岩が多いんだ。切り倒した木の根っこも取り除かないといけないし。使える畑になるのはまだまだ先だな。」

「そう…あまり無理しないでね。」

「ああ、わかってる。じゃ、行ってくるよ。」

「行つてらっしゃい。」

ジャネットと紫音はマイクを見送ってテーブルに戻った。

「畑を作ってるの？」

紫音が聞いた。

「うん。…でも大変みたいね。力仕事はお兄様しか出来ないし、暇な時期には近所の人も手伝ってくれるけど、しょっちゅうは頼めないしね。」

「私もお手伝いに行こうかしら」

「そうしてくれると助かるわ。案内するわね。」

紫音とジャネットは残った食事を食べ終え、洗い物を済ませると、二人でマイクのところへ向かった。

外へ出ると暖かい日差しと心地よい風と田園風景が、紫音をのどかな気持ちにさせた。

それは紫音に、ずっとこの一瞬の中で生きて来たような思いを起こさせた。

「気持ち良い風……。ずっとこうしていられたらいいだろうなあ。。。」

「あら、ずっとここにいればいいじゃない？」

そう言うジャネットに紫音は

「そうね。」

と言いながら少し寂しげな顔をした。

そんな紫音を見てジャネットが何か言おうとしたが、それをさえぎる様に紫音が声を上げた。

「あ、マイクだわ。」

同時にマイクも紫音たちを見つけ、作業の手を止めて二人が近くのを待った。

「来たのか。」

「ええ、紫音が手伝ってくれるそうよ。」

「そうか。ありがたいけど、力仕事だから女の子にはどうかな？こまごまとした片づけをやってもらおうか。」

「今は何をしてるの？」

紫音が聞いた。

「あそこに岩が見えるだろ？あれを掘り起こしてどかさそうと思ってるんだけど、まだ底が見えてこないんだ。」

マイクの言葉を聞いて、紫音は目を閉じ、意識を岩に集中させた。

岩はかなり大きく、掘り起こすのは無理だった。

「だめよマイク。大きくて掘り起こすのは無理だわ。」

マイクは一瞬驚いた顔をして紫音を見つめてから

「どれくらいあるんだい？」

と、紫音に聞いた。

「そうね……。まだ4mほど埋まってるわ。」

「そんなにか！」

マイクは驚きと絶望の入り混じった情けなさそうな顔をした。

「ほかの場所じゃだめなの？」

「うん……ここが一番良いんだけどな……」

「そう……」

紫音はそうつぶやくと目を閉じた。

同時に背中から緑色の霧が出てそれが羽の形になった。

途端に、岩の周りの土が一瞬のうちに掘り起こされ、岩が宙に

浮いた。

それは直径が4・5mもあるつかという巨岩だった。

驚いた顔で岩を見つめるジャネットとマイクの目の前で、岩はゆっくりと離れた場所へ移動して行き、地面に落ちた。

それはまるで夢を見ているような出来事だった。

ジャネットとマイクは呆然としながら、岩がなくなった後の大きな穴を覗き込んだ。

しばらくしてマイクが

「すごいな……」

とつぶやくように言った。

「紫音！そんなことも出来るのね！」

マイクとは対照的に、ジャネットは目を輝かせていた。

「いいなあ……。私にもそんな力が出てこないかしら。」

ジャネットの楽しそうな顔につられて紫音もニコニコしながら

「ついだから、今日中に畑にしちゃいませよ。」

そう言うのと、透き通る声で歌を歌い出した。

その歌はどこの言葉か分らなかったが、明るく元気が出てくる歌だった。

マイクとジャネットが聞き惚れていると、山の方から何やら土煙をあげながらやって来る一団があった。

近付くにつれ、マイクとジャネットの目に写ったそれは、ネズミ

や猿やイノシシといった動物達の集団だった。

あつげにとられていているマイクとジャネットを尻目に、動物達は3人の傍まで押し寄せてくると、怒涛の様に土を掘り返し、小石や木の根っこを取り除きだした。

その勢いに圧倒されたマイクとジャネットは、慌てて離れた場所に避難し、紫音は、歌いながら舞うように動物達の間を縫って歩いた。

あつという間に、小石や木の根っこやらが取り除かれ、最後に綺麗になった土を何百匹というネズミ達が真っ直ぐに掘り返し、盛り上げ、綺麗な畑が出来上がった。

それから動物達は、歌いながらゆっくりと畑から離れる紫音に付いて行き、立ち止まった紫音の周りに集まった。

マイクとジャネットも動物達の後ろに座った。

紫音の歌がゆつたりとした曲に変わると風さえも止み、その場に居る者すべて、まるで空気さえもが、その歌に聞き入っているような静寂になり、その中を紫音の歌声が漂っていった。

その歌を聞いているもの達は、心の底から言い知れぬ感動が幸福感と一緒に沸き上がってきて、ジャネットとマイクと動物達さえも涙を流しながら、幸せな感動に包まれていた。

やがて紫音の歌が終わり、余韻から醒めた動物達は、紫音に挨拶をするように擦り寄っては離れて行き、名残惜しそうに振り返りながら、山の方へ去っていった。

見知らぬ作物

動物達が去って行った後も、マイクとジャネットはしばらくの間、陶酔感を味わっていた。

二人の心はこの世界に溶け込み、二人の中にこの世界の全てがあった。

その中ですべての命は、ありのままの姿で自分を歌っていた。

やがて、我に帰った二人は立ち上がり、畑のほうへ歩いて行った。

「出来上がったわねえ。」

畑を眺めながらジャネットが言った。

「ああ、あつという間だったなあ。まるで、嵐みたいだった。」

二人は感慨深げに畑を眺めていた。

「この畑で何を作るのか、もう決めているの？」

いつの間にか二人の後ろにいた紫音が声をかけた。

「いや、まだはつきりとは決めてないよ。幸いこのあたりの土地は肥沃だから、何を植えてもいいけどね。」

マイクはそう言っつて畑の土を一掴み掴むと、手のひらに広げて眺めた。

「じゃあ、何を植えるか、私が決めて良いかな？」

「うん。何か良いものがあるのかい？」

「いいえ、まだ決めてはないんだけど、何かこの国にはないものを作ろうかなと思っつてね。」

「それはいいねえ。」

「じゃ、お茶でも飲みながら相談しましょうよ。」

ジャネットがそう言っつて三人は家の方へ歩いて行った。

三人が家に入ると、リビングではカレンお婆が編み物をしていた。「あら、お婆様、何を編んでらっつしゃるの？」

「おお、ジャネットかえ？いやなに、まだすぐに要るものじゃないが、寒くなった時の為に、紫音にマフラーと手袋を編んでやること思ってたな。」

「まあ……、お婆様。ありがとうございます。」

「おお、紫音もいたかえ？皆そろってこんな時間に珍しいの。」

「まだ、昼食には間がある時間だった。」

「それがね、今作ってる畑がね、出来上がっちゃったのよ。」

「ジャネットは四人分のお茶を用意しながら、さっきの出来事を話した。」

「ほお……それはわしも見たかったのお。さぞや見ものじゃったろうて。」

「そりゃあもう……。あっけにとられて、お婆様を呼びに行くのも思い浮かばなかったわ。でね……。」

「ジャネットが続けていった。」

「あの畑で作るものを、紫音が探してみたいんですって。」

「ふむ……。」

「この国にはない物を作ろうと思ってるんだけど……。」

「紫音がカレンお婆を見ながら言った。」

「手間がかからなくて、副食になるようなものを皆が作るようになる、国も豊かになるでしょ？」

「それはいい考えじゃ。そうじゃな……ふむ……。」

「カレンお婆は、記憶をたどるように目を細めた。」

「前に、仲の良い占い師の婆さんから聞いた事があるが、なんでも遠い異国に、皮が紫でたいそう甘い芋があるそう。その婆さんも又聞きらしいから、詳しい事はわからんかも知れんがの。」

「ふ〜ん……じゃあ、そのお婆さんに話を聞きに行ってもいいかしら？」

「ああ、かまわんよ。わしも一緒に行く。じゃが、半日かかるぞ。明日支度をして、朝から出かけるでしょうかの。」

「紫音は、首をかしげて考えていたが」

「じゃあ、お婆様、ご足労だけどお願いします。」
「なんの、かまわんよ。わしも長いこと会つとらんから、近々行くと思おもつとつたところじゃ。そうと決まったら、明日が楽しみじゃわい。」
カレンお婆は、そう言って笑った。

オルフェへ出発

翌日の朝。

まだ暗いうちに準備を終えた二人は、陽が昇るとすぐに玄関に出た。

「お婆様、途中の検問には気をつけて下さいね。最近は国王軍も焦つてるらしくて、怪しいと思えば、容赦なくしょっ引かれるそうよ。それに革命軍の名を騙る盗賊も出るらしいし。」

ジャネットは心配そうな顔をしていた。

「わかつちよるよ。そんなへまはせんわい。」

「私がいるから大丈夫よ、ジャネット。安心して。いざとなったら、検問所くらいすり抜けるし、盗賊なんか、遠い世界に飛ばしてやるわ。」

そう言つと紫音は微笑んだ。

「紫音はそんな事も出来るのね。じゃあ、安心だわ。お婆様をお願いね。」

ジャネットは驚いていたが、安心したようだった。

「それじゃ、行ってくるでな。後を頼むぞえ。」

紫音が、マイクからジャンヌお婆への土産のかごを受け取り、二人は歩き出した。

カレンお婆の住むツイダから、ジャンヌお婆のいるオルフェの町までは、南へ30km程の道のりで、途中に休憩を挟んでも昼ごろには着く予定だった。

夏の朝は清々しく、二人の歩く田園風景ものんびりしていた。

道々カレンお婆は、ソマリア国と呼ばれているこの国のことを話した。

「このキリーダ大陸には、大小15の国があつての。わしらの国はその中で、まあ中くらいの大きさじゃな。南が海に面しておつて、北と、東、西の三方を他の国に囲まれておる。他の国とは平和条約を結んでおるから、今のところ内乱があつても大丈夫じゃが、あまり長引くと他の国もほつてはおかんじゃ。なんやかやと言つて干渉してくるに違いない。じゃから国王のベルグも焦つておるんじゃ。」

表面上は、ベルグ国王の体制は安定していたが、軍備を増強するための重税が続き、国民の不満は広がった。

ベルグの父である先王のファブル国王は、国民のことをよく考えた政策を施し、国民からも名君と慕われ、長い統治の間、世情も安定していた。

しかし、一年前のファブル国王の突然の死で、後を継いだベルグが国王になってからは、軍備の増強が始まり、税も段々と重くなつていった。

ファブル国王の死は病死とされていたが、穏健なファブル国王と違い、領土拡大に野心を燃やすベルグ王子に毒殺されたという噂も

飛び交い、世情は段々と不安定になっていった。

近隣諸国も、表向きは革命軍制圧の軍備増強を危険視し、ソマリ
ア国の動向をたえず監視していた。

革命軍のリーダーであるゾロは、元々ファブル国王の右手といわ
れる側近であったが、ベルグが国王となると同時に体よく追放され、
代わりにファブル国王からは遠ざけられていたゴダがベルグ国王の
側近となった。

ゴダもベルグ国王と同じように領土拡大の野心を持っていた。

ゾロが追放された後、革命軍を蜂起するように持っていったのも、
軍備増強の為のゴダとベルグの仕組んだものだという噂もあった。

事実、ベルグ国王は革命軍をすぐに鎮圧しようとせず、軍を派遣
しても小競り合いだけですぐに引き上げて行った。

そして、徐々に軍備を増強し、兵を増やして行った。

もしも、すべてがベルグとゴダの仕組んだことであれば、最近の
国王軍の焦りも、近隣諸国への見せかけだけのものかもしれなかつ
たが、真意はわからなかった。

ベルグ国王への不満が高まるにつれ、ゾロの率いる革命軍を支援
する者が増え、自ら革命軍に参加する若者も増えていた。

彼らは革命軍の軍備がまだ整わないため、普段は何食わぬ顔で生
活をしながら、月に一度ほど密かにゾロのもとに集まり、訓練を受
けていた。

ゾロは、国王軍と雌雄を決する時の為に準備を整えていたが、
まだ力の差は歴然としたものだった。

盗賊退治

「マイクも、内心は革命軍に入りたいようじゃが、わしの所は、男手がマイクしかおらんのお。不憫とは思うが仕方ないことじゃ。」

一通り話し終えた後で、カレンお婆はそう言った。

カレンお婆の話を聞きながらゾロの名前が出たときに、紫音は、心の中に不思議なざわめきを覚えた。

それは、まだ見ぬゾロという人物との係わり合いが、深いものになりそうな予感めいたものだった。

カレンお婆の話を聞き終えた頃には、オルフェへの道のりは半分ほどになり、ちょうど山道の峠にさしかかっていた。

「この辺りが、一番物騒なところじゃが、はてさて、無事に通れるかのぉ。」

カレンお婆がそう言う前から、紫音は歩きながら意識を山全体に広げ、峠付近の林の中に隠れている10人ほどの盗賊らしき者たちを見つけていた。

彼らはそれぞれ武器を手にしていた。

「お婆様、もう少し先の右の林の中に、盗賊らしき者が10人ほどいるわ。」

紫音はそう言うと立ち止まり、目を閉じた。

彼女の意識は、遙か上空にあり、そこから下界を見下ろしていた。山から降りた道は広くなり、平野の中をオルフェまで伸びていた。その中程に十字路があり、そばには兵を収容するらしき建物があ

った。

紫音の意識は十字路に降りて行った。

十字路の脇には多くの兵が待機して、検問を受ける者たちを注意深く見ていた。

紫音は目を開け意識を戻した。

「山道を降りたずっと先のほうで検問をしてるわ。大勢の兵隊がいるから、そこへ盗賊達を飛ばして捕まえてもらいましょう。」

紫音はそう言って、カレンお婆より先に歩き出した。

峠まで来ると、はたして道の右の林から10人程の盗賊がばらばらと降りてきた。

彼らは二人を取り囲み、頭目らしき男が前に出てきた。

「ほお……これはまた、美しい女だな。」

男はそう言って、紫音を品定めするように、上から下まで舐める様な目を見た。

そして

「我々は革命軍の者である。いま、武器調達の為に献金を募っておる。この国の為に力を貸してくれ。」

と言った。

「お金なんか無いと言ったらどうするの?」

紫音は不敵な笑みを浮かべた。

「その年寄りには金目のものを置いていってもらおう。お前は俺たちと一緒に来てもらう。わが革命軍はまだまだ人手が足りんのだ。色々手伝ってもらいたい。」

そう言う男の目を、紫音はじつと見た。

男は、見つめる紫音の緑色の目が一瞬心の中の隅々まで広がり、自分のすべてを見透かされた気がした。

男の目に、畏怖の色が浮かんだ。

それでも男は虚勢を張った。

「な、何が可笑しい！我々を馬鹿にしているのか？」

「革命軍なんて嘘ね。あなた達はこの山の中に住む、ただのごろつきだわ。あなたは、この前まで確かに革命軍にいたけど、行いが悪くてリーダーのゾロに追放されたのね。」

「な、なんだと・・・こ、このアマ、なんでそんな事を知ってる？」

男は革命軍の体裁をかなぐり捨て、盗賊の地をむき出しにした。

「おい、みんな！かまわねえから二人とも山ん中へ連れて行け。婆は身ぐるみ剥いで、山ん中へ埋めて殺しちまえ。女には俺たちの慰みもんになってもらおう。これだけのいい女だ。散々いたぶってから売り飛ばしてもいい金になるぜ。」

盗賊たちは下卑た目で紫音を見ながら近寄り、二人を捕まえようと手を伸ばした。

が、次の瞬間二人は消えていた。

だが、二人は消えたのではなかった。

二人を捕まえようとした部下たちは一瞬呆然としたが、慌てて周りを見回すと、後ろに二人はいた。

それぞれの部下たちは、釈然としない面持ちで首をひねりながら

も、もう一度二人に近寄り、捕まえようとした。

しかし、結果はまた同じように二人は目の前から消え、後ろを振り向くとそこにいるのだった。

少し離れて見ていた頭目らしき男の目には、部下達が二人のすぐそばに近寄った次の瞬間には、一瞬で二人をすり抜けてしまっていた。

紫音は自分とカレンお婆の周りの空間を繋いでしまっていたのだった。

そのため、盗賊たちの目には二人は見えているが、実際はその場所にはいないのと同じであった。

盗賊の中の気丈な一人が、紫音に向かって思い切り腕を伸ばし剣を突き刺した。

しかし、男の剣を持つ腕は、まるで体から切り取られたように、紫音の背後に浮かんでいた。

盗賊たちの顔が驚愕に震え、思わず後ずさりしていた。

彼らの頭の中に紫音の声がした。

それは盗賊たちにとって、例えようもなく恐ろしい声だった。

「今までの報いを受けなさい。」

それが頭の中に響いた時には、盗賊たちは、遠く離れた国王軍のいる十字路の真ん中に飛ばされていた。

十字路では、突然目の前に現れ、ぼーっとして立っている男たちに、警備の兵らは驚いて、何事かとたじろいだ。

しかし、男たちはそれぞれ武器を持っており、それを見た兵達は慌てて、建物の中にいた者も含め、総がかりで盗賊達を取り押さえた。

後に、盗賊達を取り調べた国王軍の指揮官は、何を聞いても恐れ

おののいて

「悪魔が・・・悪魔が・・・」

としか言えない盗賊たちに手を焼いたが、調べが進むにつれ、彼らの悪事の数々が明るみになり、国王軍の手で処刑された。

オルフェに到着

盗賊たちを検問所へ飛ばすと同時に、紫音の意識も検問所へ飛び、盗賊達が兵に捕まるのを見届けていた。

紫音は目を開けて言った。

「盗賊達は捕まったわ。」

「ほっほっほ、奴らもさぞかし、たまげたことじゃろうて。愉快でならんわい。しかし、これで難儀する人もなくなるじゃろう。こちらの住民も、奴らには手を焼いておつたろうからのお。」

一部始終を、そばで黙って見ていたカレンお婆は、可々大笑しながら言った。

盗賊達に触れさせもせず、彼らを難なく、遙か遠くまで飛ばしてしまふ紫音の力も凄いものであったが、それを見て動じることもなく、大笑いするカレンお婆の肝も据わったものであった。

「しかし、紫音や。そなたは、ほんに不思議な女子じゃのお。それだけの力があれば、この国はおるかこの大陸、いや、世界の王になる事も不可能ではあるまい。」

「それは……」

紫音の言葉が一瞬途切れた。

「それが必要とあらば、私はそうします。しかし、民の幸せのために国を治める役目は、たぶん私ではありません。」

カレンお婆は紫音をじつと見つめた。

「それに……それは私の望みではありません。」

そう言った紫音の表情に、寂しい影が浮かんですぐに消えた。

盗賊たちの出現で、警戒心の強くなった兵たちのいる検問所は、避けた方が無難だろうという紫音の提案により、二人は山道の峠からオルフェの町のすぐ近くまで飛んでいた。

紫音にとって、遠くへの移動手段はいくつかあったが、少人数だ

と空間を折り曲げてしまふのが、一番手っ取り早い方法だった。

例えば、四角い紙の両端に書かれた、二つの黒い点の真ん中で紙を折り曲げ、点と点を引っ付けるように空間を折り曲げてしまふのだった。

近くに見えているオルフェの町へ歩きながら、カレンお婆は言った。

「これは楽じゃのお。紫音や、なぜ最初からこうしなかったのかえ？そうすればすぐに来れたものを。」

「ええ……。でも実際に歩いてみないとわからない事もありますし、盗賊の事も気になったし、お婆様とお話もしたかったし、何より……。」

紫音は言葉を切った後

「歩くことは体に良い事ですわ。お婆様にとっても私にとっても。」
と言つて笑つた。

「ほっほっほ、確かに最近はお外に出ることも少なくなつたからの。ボケないためにもこれからはもっと出歩くとするかの。」

二人は笑いながらオルフェの町へ入つていった。

ジャンヌお婆の家に到着

オルフェの町は、ソマリア国で二番目に大きい町といわれるだけあって、活気があり、町の中ほどの市場では人々が溢れかえり、ざわめき合う声で喧騒に満ちていた。

その市場から少し離れた場所に、ジャンヌお婆の店を兼ねた家があった。

店の入り口には、敷物の上に水晶球が描かれた簡素な看板がぶら下がっていて、一目で占い師の家とわかった。

夏の事とて店の戸は開け放たれていて、紫色の暖簾が風に揺れていた。

カレンお婆は、暖簾を掻き分けて中へ入り、声をかけた。

「ジャンヌ、いるかえ？」

店の中は、入ってすぐの狭い土間に4脚の椅子が置いてあり、壁で奥と仕切られていた。

その壁の右側の扉のない、入り口と同じ紫色の暖簾がかけられた出入り口から、カレンお婆と同じ年恰好の老婆が顔をのぞかせた。

「おお、カレンか。早かったのぉ。いま、お客がおるでな、暫く待ってくれぬか。」

ジャンヌお婆はそう言って、また奥へ引っ込んだ。

カレンお婆は、椅子にどっこいしょと座り、紫音も横に座った。

「わしは、今日来ることをジャンヌには言っとらん。あ奴はいつも

そうじゃ。わしが来ることを前もって分かるらしい。」

ほっほっほと、カレンお婆は嬉しそうに笑った。

久し振りに見た友人が、元気でいることが嬉しかったのだろう。

暫くして、客らしき若い女性が帰っていき、ジャンヌお婆が奥から出てきた。

「久し振りじゃな、カレン。元気そうで何よりじゃ。」

ジャンヌお婆もまた、カレンの元気そうな姿を見て、喜んでいた。

「おお、まだまだお迎えは来そうにないわ。お主も元気そうじゃな。」

「うむ。わしも、自分の寿命だけはわからんが、まだ死ねんようじや。」

二人は手を取り合い、抱き合って久し振りの再会の挨拶を交し合った。

その後、ジャンヌお婆は紫音を見つめ

「むう……。」

と一言呟いた。

カレンお婆は、ジャンヌお婆に紫音を紹介した。

「この人は、紫音というての。山の中で倒れておつたのを見つけて、わしの家へ連れて来たんじや。今、わしらと一緒に暮らしてある。」

「紫音と申します。カレンお婆様にはごやっかいをおかけしていま

す。
「

紫音も挨拶をしながら、ジャンヌお婆を見つめた。

ぼつちやりと福々しい顔のカレンお婆とは違い、ジャンヌお婆は細い顔にやや鉤鼻で、透き通ったよく光る目をしていた。

ややあつて、ふうと息を吐き出したジャンヌお婆が言った。

「ダメじゃ。そなたの心は、はかり知れん。わしにはちと、大きすぎて手に余るようじゃな。」

そう言った後

「ささ、ここじゃゆっくり話もできん。わしの居間でくつろごうぞ。もう店じまいじゃ。」

そう言いながら、ジャンヌお婆は表戸を閉め、看板を裏返しにしてしまった。

どうやらそれが、閉店の合図になっているらしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2499w/>

紫音の少女 郷愁

2012年1月11日23時53分発行